立原正秋

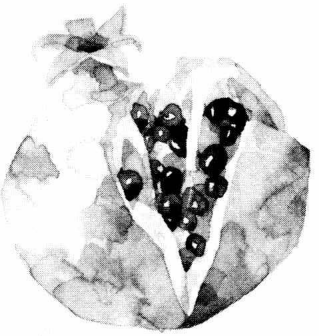
冬の旅

下巻

冬の旅

下巻

立原正秋



冬の旅（下巻）

昭和四十四年九月二十日　発行
昭和四十六年九月十日　二十六刷

定価　四五〇円

著者　立原正秋
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京(03)二六〇一一一一
振替東京八〇八番

（乱丁、落丁本はお取替えいたします）

印刷・東洋印刷株式會社　製本・共同製本所
© 1969 Masaakr Tatihara printed in Janted

◇目次

夏のことぶれ（続）……5
旅だち……39
光と風と雲……68
木枯……100
春の草……123
転身の賦……156
鷗……187
旅の終り……246

裝幀　堀　文子

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

冬の旅（下巻）

夏のことぶれ（続）

修一郎はあいかわらず遊びまわっていた。ムスタングをボルボに乗りかえたのは今年の二月で、この金は祖父の悠一からだしてもらった。祖父とはわかちがたい愛情でつながっていた。父の理一が息子を疎んずればするほど、孫にたいする悠一の愛情が深まっていったのである。もちろん悠一は、孫にかける愛情を至極正当な性質のものであると考えていた。

都電停留所の四谷三丁目のちかくに、舟町という小さな町がある。ここは、宇野悠一の家がある大京町から歩いてすぐの場所である。この舟町の一角に、〈フール〉というスナックバーがあった。フールとはもちろん英語で馬鹿という意味である。物好きな男が洒落（しゃれ）のつもりでつけた名前だったろうが、この店には本当に馬鹿な人間があつまっていた。店がひらくのは午後六時で、閉店は暁方の四時である。この間にこの店にあつまる人種は、テレビタレント、流行歌手、映画俳優の卵などである。彼等の頭が本当に悪いわけではない。タレントや流行歌手になれた以上、人並以上の才能を持っていたし、映画俳優の卵であるからには、これまた人並以上の美貌をそなえていた。つまり彼等は馬鹿げた遊びしか出来ない連中だったのである。この店にはルーレット、麻雀（マージャン）が出来るよう場所が設けてあった。

ここにあつまってくる前記の人種は、ひまさえあると賭博をやっていた。殊に麻雀がさかんだ

った。全国麻雀大会などという会があちこちで催されているくらいだから、現在の日本に麻雀人口がどれくらいいるのか、たぶんそれはたいへんな数にのぼるだろう。

修一郎はこの店に去年の夏頃から通っていた。ウイスキーを一本買ってそこに自分の名前を書き、棚においておく。好きなときに好きなだけウイスキーをのむ仕掛である。

修一郎は麻雀が強かった。まず敗けるということがなかった。この店にくる流行歌手や映画俳優のなかで、麻雀が強いものがいないのもひとつの理由だったが、彼はここでけっこう小遣いかせぎをやっていた。

夜一時をすぎると、店をひけたバーのマダムなどもやってくる。客につれられたバーのホステスもくるし、なかにはホステスが独りでのみにくることもある。

つまり修一郎はこの店にきているかぎり、金と女には不自由しないわけだった。独りでくるバーのホステスは、口説けばたいがいものになった。数年前に比べて彼の遊びもいくらか高級になったわけであった。

ホステスのなかには、おたがいに遊びだから、といってホテル代を半分もつのもいた。

この〈フール〉に、ある夜、タイガーレコード会社の専務のひとりが、歌手といっしょに現われた。そして、どういうきっかけからか、歌手が自分の得意としている流行歌をうたった。すると、店にいた者のうち、素人でも歌のうたえる者が、つぎつぎに立って歌をうたった。そして修一郎も一曲うたったのである。浪花節調の流行歌だった。

そして修一郎がうたい終ったとき、一人の男がそばによってきた。タイガーレコードの専務だった。

「あなたは、テレビののど自慢コンクールに出たことありますか？」

と専務は訊いた。
「そんなのないですよ」
と修一郎は答えた。事実そんなことはなかったのである。
「私はこういうものですが、もう一曲、なにか、こんどは別の曲をうたってもらえませんでしょうか」
専務は名刺をだして手渡しながら言った。名刺には、タイガーレコード専務青葉初太郎とあった。
そこで修一郎は、こんどは別の浪曲調の流行歌をうたった。そして、彼がうたいおわったとき、青葉初太郎がよってきて、
「明日、うちの会社に来て戴けますでしょうか。私は、あなたを、相当な歌手になれる声だと見込んだのですが」
と言った。
「え？　俺が歌手に」
「歌手になりたいと思ったことはありませんか？」
「そんなのないですよ」
「私達は、テレビののど自慢コンクールから出る新人よりも、あなたのように、自分の才能に気づいていない人を発掘したいのです」
そして青葉初太郎は、自分がこれまで発掘した歌手の名前を幾人かあげた。
「歌手か。……それも悪かないな」
「明日、うちの社に来てテストを受けてみませんか」

青葉初太郎は熱心だった。
「じゃあ、行ってみようか」
「十時にいらしてください。私の目に狂いはないはずです」
専務は自信ありげに微笑した。
人間の運は妙なところで方向を変えるもので、修一郎は、おまえは歌がうまいぞ、とまわりから言われたことはあるが、自分に歌手の素質があろうなどとは、考えてみたこともなかった。
こうして修一郎はあくる日の朝の十時、西銀座にあるタイガーレコード会社を訪ねた。
この日は、歌手志望者の声のテストがあると見え、十人あまりの若い男女が来ていた。
要するに修一郎はこの日テストに合格し、タイガーレコード専属の歌手として基礎を勉強してみないか、とさそわれたのである。
修一郎は考えさせてくれ、と答えてこの日は帰ってきた。
来年、大学をでたら、祖父のコネでどこか一流の会社に入るつもりでいたところへ、急に降って湧いたように歌手になれる才能がある、と言われてみても、実感がともなわなかった。
彼はこれを悠一と園子に相談してみたのである。
「おまえが歌手に？」
悠一はびっくりして妻と顔を見合せた。
「レコード会社の重役が、そう言うんだよ。きみには才能があるって」
修一郎も実感がともなわないので、ごくあたりまえに答えた。
「宇野家の長男が歌手になるのか。わしはあまり気がすすまんな。おかしな身ぶりで歌うあれだろう」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

悠一はいい顔をしなかった。
「俺にもぴんとこないんだ」
「自分でも気がすすまないのに、そんなことを相談する奴があるか。わしは歌手になるのは反対だ」
「よし、これできまった。明日歌手志望はやめる、と電話で返事をしておこう」
そして彼はあくる日の朝十時、学校にでる前にタイガーレコード会社に電話でこの旨を伝えた。青葉専務はまだ来社していなかったので、女事務員が修一郎の伝言を後で専務に伝えるということだった。
そして修一郎は神田の学校に行ったが、なにか気持がさっぱりしなかった。ここのところ彼は怏々とした日を送っていたのである。父から疎んじられているのを考えると、自己嫌悪がさきにたった。そして、自己嫌悪と並行して劣等感が彼を苛めていた。行助にたいする劣等感はなんとしても拭いきれなかった。前年の春、行助が西北大学の理工学部に合格したとき、修一郎の劣等感は決定的なものとなった。宇野電機を継ぐのはあいつになるのか、という思いが湧き、父への憾みと、澄江母子にたいする憎悪が際限もなく湧いてきた。以来、彼は、決定的になった自分の劣等感を、ある意味では育ててきたとも言えた。つまり彼は、行助にたいして抱いている劣等感のなかに、自己鍾愛の極を見出していたのである。
祖父のコネで一流会社に入れるかどうかはわからなかった。入れたとしても、大学も裏口入学し、それもやっとの成績で卒業し、そして勤めさきの会社にも裏口入社をしなければならない、と考えると、いつもの劣等感に苛まれるのであった。俺は一生こうして裏口ばかりを歩かねばならないのだろうか、という思いも湧いて来ようものであった。

こうした情況が修一郎を孤独におとしいれた。彼はこの孤独に耐えられなかった。もし孤独に耐えられるほどの青年だったら、裏口入社など考えなかっただろうし、また義母を犯そうなどという行動にも出なかっただろう。つまり、才能がないのに自尊心ばかりが高い人間になっていたのである。彼の自尊心を裏づけるものがなにもなかった。

こうして修一郎は劣等感と自尊心が綯いまぜになった自分だけの世界に安住しきれなくなると、外に出て事故をおこすのであった。

この日、修一郎は、学校からまっすぐ家に帰った。すると、そこへタイガーレコードの青葉専務が訪ねてきた。

「せっかくのチャンスを見のがすのはどうでしょうかね」

と青葉専務は言った。

「俺、歌手になるなど、あまり気がすすまないんだ」

修一郎はしかし意外に自分があかるい感情になっていることに気づきながら答えた。

「あなたね、いま全国に歌手志望の男女がどれくらいいると思いますか。十万人ですよ。常時十万人の歌手志望者がいるのです。そのなかから毎年歌手としてスタートできるのが二十人そこそこです。そしてさらにその二十人がふるいおとされ、歌手として残るのはせいぜい五人か六人というところです。この五人の歌手は、つまり才能があるということですよ。私は、あなたを、この五人のなかにはいれる才能をもっている人だと思う。考えなおしませんか。あなたのその七首のきいた声で歌いまくってごらんなさい。若い女の子がきゃあきゃあ騒ぎたてますよ。歌手とプロ野球の選手は、あなた、現代の英雄ですよ。英雄になれるチャンスを見逃すのは、なんとしても惜しいじゃありませんか」

青年の自尊心や虚栄心をくすぐる上手な勧誘であった。
「じゃあ、もう一日考えてみるよ」
「あなたはいまスマートな車に乗っている。ところが、あなたがいま売れっ子の歌手だとしたらどうでしょう。考えてみただけでもカッコいいではありませんか。現代の英雄がいちばんスマートな車に乗っているわけです。ようく考えてくださいよ。歌手になりたくてもなれない人が多いのに、あなたはレコード会社の重役から見込まれたのですよ。こんな例はそうざらにはないですよ」
そして青葉専務は、明日といわず、心がきまったら今夜にでも自宅に電話をくれ、と言いおいて帰って行った。
青葉専務が帰ったあと、修一郎はいい気持になっていた。自尊心と虚栄心をこれだけ充たしてくれた話は最近にないことだった。
そして彼はこの日の夜十時すぎに〈フール〉に出かけてみた。店にはれいによって売れっ子の歌手が数人きていた。そして彼等のまわりをファンがとりかこんでいた。歌手はまるで王様のようにふるまっていた。
修一郎はこのとき、もし俺に歌手の才能があるとすれば、あの青葉専務の言うように、十万人のなかから選ばれた一人になれたとすれば、俺は、行助を見返してやれるだろうか、劣等感のなかで生きている現在から脱けでれるだろうか、と考えてみた。
この夜、修一郎は麻雀(マージャン)をやらなかった。麻雀をやるかわりに酒をのみ、ファンにとりまかれている歌手を眺めていたのである。そうして時間が経過していったとき、修一郎は、頭のなかでひとつの夢を組みたてていた。それは実にたのしい夢であった。

修一郎は、女性週刊誌などで流行歌手の生活、彼等の住居の大きさ、はては彼等の女性関係などについて書かれた記事を読んだことが何度かある。彼等は二十歳そこそこで莫大な収入があり、大きな洒落れた家に住み、愛玩用の一頭十万円もする犬を飼い、そして車は何台も持っている、そんな生活をしていた。

もし俺があのようになれるとしたら……と修一郎は考えたのである。すると、酔いのまわった頭のなかで、ひとつの夢が組みたてられた。流行歌手として売りだした宇野修一郎は、年収五千万円、歌手になってから三年目には、彼を疎んじた父の屋敷の正面に、父の屋敷より倍も大きな家を構え、自家用車は五台、召使は三人、そして連日ファンからの手紙が百通は届くような身分になっている……。こんな夢を組みたててみたのである。

もし青葉専務の言うことが事実なら、俺も年収五千万円の男になれるはずだ、と修一郎は考えたのである。人が一生かかっても得られない金を、俺は一年で稼げるではないか……。

彼は席をたち電話台の前に歩いて行った。そして青葉専務の自宅にダイヤルをまわした。

「宇野です」

と修一郎が言ったら、待っていましたよ、と青葉専務の弾んだ声がした。修一郎は、青葉専務のはずんだ声をきいたとき、彼がいかに自分に期待をかけているのかを知った。俺はいままでどうして自分に歌手の才能があることに気がつかなかったのだろう……ちくしょうッ！　俺は売れっ子の歌手になって行助を見返してやろう……。

青葉専務とはあくる日の正午に再びタイガーレコード会社で会うことになった。

青葉専務との約束がきまると、修一郎はいい気持になって店をでた。そして、大京町の祖父母の家に歩いて戻りながら、これで俺にも運がひらけてくる、なにも宇野電機のあととりとなり朝

から晩まで働く必要はないのだ、だいたい俺にはサラリーマンなど似合うはずがない、と考えた。

あくる日、修一郎は、自慢のボルボを運転してタイガーレコード会社にでかけた。会社につき、受付で来意を告げ、しばらく待っていたら、青葉専務がでてきた。

「昼めしをいっしょにしませんか」

と青葉専務は言い、修一郎の返事もきかずに先に歩きだした。

行ったところはちかくの寿司屋だった。

「ほんとに歌手になれるんですか？」

修一郎は前夜とちがい半信半疑だった。

「なれますよ。声がいいんだし、あなたの努力次第で一流歌手になれますよ。私の会社と契約しますと、わずかですが月に小遣い程度の金はでます。そして向う半歳は、歌手になるための基礎を勉強してもらいます」

「半歳もかかるんですか？」

修一郎はすぐ歌手になれると思っていたのである。

「なにごとによらず基本が大事ですよ。いきなり歌手にはなれませんよ」

青葉専務はじろっと修一郎を見た。

修一郎には意外だった。三カ月ほど前のことだったが、十七歳のある娘が、タイガーレコードから歌をふきこんで売りだし、それがすごい当りをとり、その娘はいまではあちこちのテレビ局でひっぱりだこだった。すると、あの娘も、基礎を勉強したのだろうか……。

「どうです、あなた、日に一回、午後からでいいが、発声練習にこれますか？　熱心な人は、会

社で基礎を勉強するほかに、夜は個人レッスンを受けていますよ。勉強しなければ歌手になれませんからね」

青葉専務は言った。

「個人レッスンというと……」

「授業料をはらって個人の先生について習うのですよ。たとえば、宝塚歌劇団でいま名を売っている女の子達ですが、あの子達があそこまでなるには、たいへんな時間と金がかかっているのですよ。彼女達は音楽学校に通いながら、一方で、週のうち二日は歌の個人レッスンを受け、二日は踊りのレッスン、というような勉強をしてきているのです。あなた、宝塚音楽学校というのを知っていますか？」

「知りませんね」

「努力してはじめて世に出れるんですよ。私がこんなことを言ったからといって恐れをなしちゃいけません。とにかく、あなたには、天稟（てんぴん）の才能がそなわっているんだから、六ヵ月みっちりやれば大丈夫だ。私の目に狂いはない。まあ、私にまかせておきなさい。六ヵ月間、基本を勉強して、それでよいとなったら、作曲家と作詞家にたのみ、今年の暮あたりは吹きこみですよ」

修一郎には、青葉という男がわからなくなってきた。彼の話をきいていると、すぐ歌手になれる錯覚をおこさせた。そして、もうすこし話をきいていると、そう簡単には歌手になれない気がした。どちらをとってよいのか、わからなかった。

「しかし、日に一回は発声練習にこなければならないとなると……」

秋までに卒業論文を仕上げねばならなかった。それを考えると、毎日、発声練習に通うなど、ちょっと出来そうもなかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com